

墨田区

認知症予防「声日記」が好評

区提供アプリ、継続率が改善

墨田区が区民に無償で提供している軽度認知障害（MCI）のセルフチェックアプリ「はなしてね」。今年、日々の出来事を声で記録する「声日記」の機能が新たに追加され、好評を博している。区高齢者福祉課によると、声日記がアプリの継続使用につながっているといい、「認知症検診の受診者を掘り起こす一つの手段として有効」と期待する。



「間違っちゃって修正して要約してくれる。この1週間で忘れてしまったことも思い出させてくれて、これがすごくいい」

墨田区両国在住の佐藤守信さん（79）は、今年4月から「はなしてね」を利用しており、今年追加された「声日記」がお気軽に入りだ。今日あった出来事をスマホに向かっ

声日記を利用する佐藤さん。墨田区産業共創施設「SUMIDA INNOVATION CORP」

て3分ほど話すと、AIが実際の発話内容を修正して要約。過去の記録と比べて、行動の傾向を分析したりして、運動や外出など明日の行動を提案してくれる。

「今日はこれまでと比べてどうだったかを分析してくれるのが面白い」と佐藤さん。最初は漫然と「ひざが痛い」と話していたが、別の日に「立ち上がってすぐは痛いけど、その後は治る」と話し掛けると、アプリは「昨日よりはよくなっていますね」と応答。生活上の細かな気づきが得られるという。

「はなしてね」は音声言語AIを用い、利用者の声を分析することでMCIをセルフチェックできるウェブアプリだ。墨田区の支援事業に採択さ

れたAI企業が2024年度に開発した。同アプリには日々の移動や運動、食生活などのトピックについて1分間自由に話すと、話し方などから「脳の健康状態を測定する機能があるが、使える頻度は3カ月に1回で、アプリ使用の継続率が伸び悩む課題があった。

6%にとどまる。

認知症検診の普及を進める上では、「認知症」という言葉が持つネガティブな印象がハードルになるという。区が高齢者に認知症検診のチラシを送付したところ、「認知症じゃないのに何で送ってくるのか」とクレームを受けた区職員もいる。

こうした中、アプリは気軽に区民に使うてもらえるよう、「脳の健康習慣アプリ」をうたい、「老化」や「認知症」といった言葉の使用を避けているのが特徴だ。

区福祉部の加藤靖規地域包括ケア推進担当課長は「『ものわすれ』など柔らかな言葉を使い、認知症対策も『脳の老化予防』などに言い換えて、いかにイメージをキャッチーにつないでいくかが大事」と強調し、「アプリは地域福祉の充実につながる。利用者数をさらに増やし、データを蓄積するのがファーストステップ」と期待を込める。

■ネガティブな言葉使わず

区が認知症対策を進める上で課題となっているのが検診の受診率の低さだ。区によると、受診率は昨年度、対象者の5・